田村志津枝さん コラム

PICK UP MOVIE

11/19〜

『金子文子と朴烈（パクヨル）』

［2017年／韓国／5.1ch／129分］PG12
監督：イ・ジュンイク
出演：イ・ジェフン、チェ・ヒソ、キム・インウ、キム・ジュンハン、山野内扶、金守珍
原題：박열／英題：Anarchist from the colony
配給・宣伝：太秦

(C)2017, CINEWORLD & MEGABOX JOONGANG PLUS M , ALL RIGHTS RESERVED

民族差別の根源は何なのか

関東大震災から100年にあたる今年、この惨事を振り返るさまざまな試みがある。そのひとつ、上田映劇で本作が上映されるのは貴重だと思う。関東大震災の混乱の中で6000人にものぼる在日朝鮮人が虐殺されたが、日本はいまだにこの事実に正面から向き合えていないからだ。他方韓国で2017年に作られたこの映画は、この虐殺が起きてしまった根源に鋭く迫っている。

映画の始まりは関東大震災の少し前の東京。金子文子はある日、雑誌に掲載された「犬ころ」という詩に強く心を惹かれる。作者は朝鮮人アナキストの朴烈で、文子が働く「社会主義おでん屋」の常連でもあった。時はいわゆる大正デモクラシーのさなか、社会主義者やアナキストが集うこんな場があったとはちょっと驚きだ。2人は意気投合し同居を始める。信頼できる同志、愛し合う恋人として。だが互いに依存せず自立して。そう、この作品は一途な愛の物語でもある。

2人は「不逞社」を結成し、雑誌や新聞で自分たちの主張を発表していく。この社名には、お上を手玉にとろうとの意気が感じられる。韓国併合以降、日本政府に不満を持つ朝鮮人は不逞鮮人と呼ばれ、不当な監視下に置かれていたからだ。

1923年9月1日、関東大震災が発生する。大混乱のなか流言飛語が飛び交い、自警団が組織され、残忍な朝鮮人虐殺が横行する様が描かれる。そんな状況下、朴烈と金子文子は保護検束の形で捕らわれ、2人にとってさらに厳しい闘いが始まる。彼らはついに、皇室暗殺を計画したとして大逆罪で裁判にかけられることになる。

この出来事は日本では、朝鮮人アナキストによる大逆事件「朴烈事件」とされている。この史実をもとに韓国で作られたこの映画はしかし、暗黒時代の残虐な話でありながら反面、果敢に権力に立ち向かう輝かしい青春の物語でもある。在日の朝鮮人青年たちは、手酷い差別や屈辱を受けながらも誇り高く理想を追い求めていくからだ。

そして何より朴烈や金子文子の口から出る、日本への厳しい批判には耳を傾けずにはいられない。史実を物語にするとは、言うまでもないが事実を羅列することではない。事実を越えたより深い真実を描き出すことだ。チェ・ヒソ演じる金子文子は、幼少時から逆境に耐え、ついに自分が生きる場をみつけた。彼女が堂々と権力と対峙し、日本における民族差別を舌鋒鋭く批判する姿には、胸がすく思いがする。もちろん作中の金子文子が実像の真髄に脚色を加えたものであることは承知の上だが、作り手が作品に込めた熱いメッセージをしっかりと受け止めたいと思う。

プロフィール
田村志津枝：ノンフィクション作家。一方で大学時代から自主上映や映画制作などに関わってきた　1977年にファスビンダーやヴェンダースなどのニュー・ジャーマン・シネマを日本に初めて輸入、上映。1983年からホウシャオシェンやエドワード・ヤンなどの台湾ニューシネマ作品を日本に紹介し、その後の普及への道を開いた。